

## 展覧会のご案内

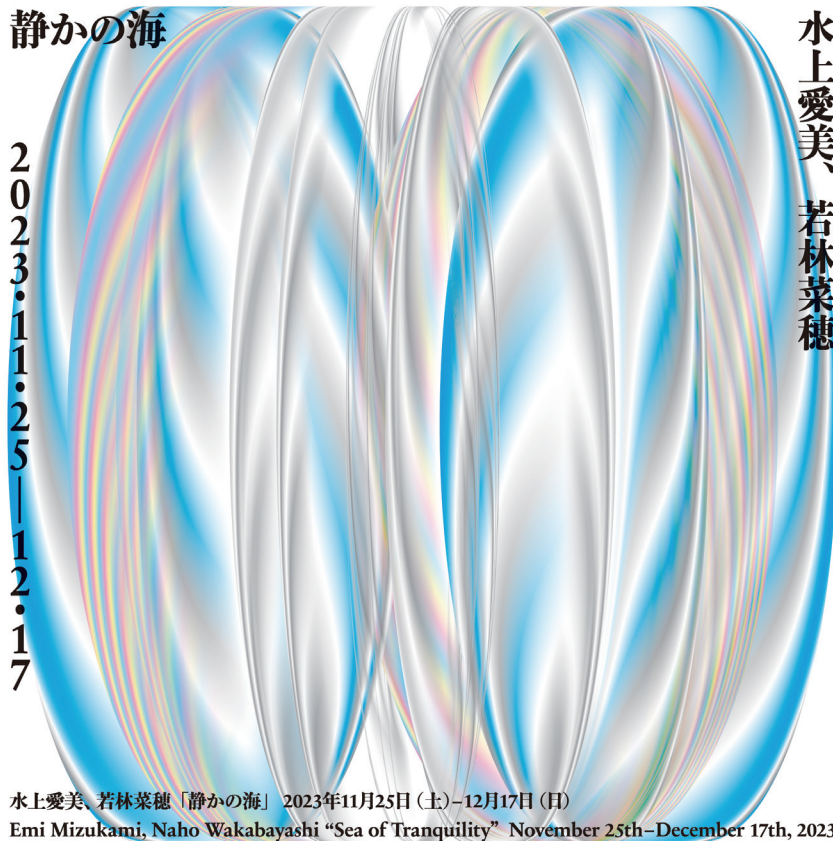
### 水上愛美、若林菜穂「静かの海」

会期：2023年11月25日(土)－12月17日(日)

営業時間：12:00-18:00 \*月・火・水 休廊

会場：駒込倉庫 (東京都豊島区駒込 2-14-2)

トークイベント：2023年12月10日(日)18:00- 及び 12月17日(日)18:00-



この度、水上愛美と若林菜穂による展覧会「静かの海」を駒込倉庫にて開催致します。

人類の心とイメージの歴史、政治や技術の進歩を月との関係によって対象化し、それぞれのアプローチによる絵画を提示する、水上愛美と若林菜穂による新作企画展。展示タイトル「静かの海」は月面に存在する、玄武岩の平原に由来する。

水上愛美と若林菜穂は90年代前半に生まれた作家であり、ともに視覚的・心的に認識される堆積されたイメージについて、独自の手法と態度を持つペインターとして知られている。古今東西の神話や逸話、伝承を積層させ、見通すことが不可能でも物質的に現前する、次元を増幅させた絵画を制作する水上愛美。写真や印刷物を下絵に用いながら普遍的無意識や集合的自我に繋げるように、主観的な記憶を共有可能で多義的で記号化されきらないイメージへと油彩画を通して変換させる若林菜穂。彼らの試みは現象学的絵画を再考、拡張するものとしても捉えられる。

月面着陸を果たしたことで、月は幻の場所ではなくなった。同様に技術の発達と歴史の発展により、人間の心も神々と繋がるホメロスの時代から遠く離れ、限界がありながらも世界の表層を受容する機能主義的な心へと変化し、今やその心のシステムは人から切り離された独自のプログラムへと移り変わろうとしている。

その中で、現在の絵画はどのような世界と結びつくのか。

地球の衛星であり、太陽の光を反射し、近くて遠い何かを映し出すレンズでもある月は、古代から幻を生み出す絵画平面であった。本展はそのレンズのあちらとこちらの物語を、それぞれの作家の生み出すイメージによって問いかける。

## 水上愛美 (みづかみ・えみ)

1992年東京都生まれ。2017年多摩美術大学絵画学科油画専攻卒業。

主な個展に「And So it goes」IARDER GALLERY (ロサンゼルス /2023)、「Catharsis Bed」CADAN 有楽町 (東京 /2022)、「So it goes」4649 (東京 /2022)、「Dear Sentiment」TOKAS 本郷 (東京 /2021) など。

主なグループ展に「Fungal Fugue」HAGIWARA PROJECTS (東京 /2022)「Art Collaboration Kyoto」(京都 /2022)、「Paprica」Each Modern (台北 /2022)、「いつかは世の中の傘」TALION GALLERY (東京 /2022)、「COPE」No Gallery (ニューヨーク /2022)、「VOCA展 2022」上野の森美術館 (東京 /2022)、「Paintings for Stranger」TOKAS 本郷 (東京 /2020)、「4649 at Pina」(ウィーン /2020)、「底流 / Large eddy」TWS 渋谷 (東京 /2016) など。

古今東西の神話や伝承、歴史上の寓話や悲劇を引用したモチーフ / 場面を描きながら、世界最古の砂漠の砂を混ぜたサンドペーストによってそれらを何度も塗りつぶしては上書きを繰り返し、絵画の表層、中層、背面から構成される複層的な絵画を作り出す。人類の悲哀を伴う物語を地層のように重ねることで、不可視な過去未来を圧縮した時空間として絵画を成立させ、その物質的な鑑賞体験を増幅させる。近年では天文学者の藤田智弘氏との共作も行っている。



「If the Accident Will,」 2023  
キャンバスにアクリル、チャコールペンシル、  
サンドペースト、砂漠の砂、リネン 164x132cm



「Sleeping Dog and Some Salvation」 2023  
キャンバスにアクリル、チャコールペンシル、  
サンドペースト、砂漠の砂、リネン 80x55.5cm



個展「catharsis bed」2022  
CADAN 有楽町での展示風景

## 若林菜穂 (わかばやし・なほ)

1991年東京都生まれ。2017年武蔵野美術大学造形学部油絵専攻卒業。

主な個展に「Sprinkle Halo」KATSUYA SUSUKI GALLERY(東京/2023)、「Paradoxical sleep」25ji(東京/2022)、「MAGIC FLIGHT」数寄和(東京/2021)、「wink」四谷未確認スタジオ(東京/2020)など。

主なグループ展に「いつかは世の中の傘」TALION GALLERY(東京/2022)、「Kinder Wonder Garden」KATSUYA SUSUKI GALLERY(東京/2022)、「第三十三回ホルベインスカラシップ 成果展」佐藤美術館(東京/2020)、「清須市第9回はるひ絵画トリエンナーレ」(愛知/2018)、「木曾ペインティングス vol.2」木曽路美術館(長野/2018)、「Slide, Flip, and Turn -7人のアーティストブック展-」武蔵野美術大学美術館図書館(東京/2018)など。

作家自身の日常や旅先でのスナップフォトや色紙などを用いたコラージュをもとに、電子的/物理的/心的な要素を加算して、例えばスクリーンの明度や印刷物のざらつき、記憶や認識の遠近の感覚等を交えた上で、複合的なイメージとして油彩画を描く。リアリティと記憶の輪郭が前後することで、現実には存在しない普遍的無意識に接続するイメージを生み出している。



「十全」2022  
キャンバスに油彩  
33.3×33.3cm

「落合」2023  
キャンバスにアクリル、油彩  
91×72.7cm



個展「Paradoxical Sleep」2022  
25jiでの展示風景(撮影:三熊將嗣)

本展覧会では、複数のトークイベントを開催いたします。

各回定員 20 名、事前予約優先となります。(空席がある場合は当日のご参加も可能です)

## 【トークイベント】

### ◆12月10日(日) 18:00-19:30 「心をたどる、描くこと」

登壇者：下西風澄、水上愛美、若林菜穂

3000年前の古代ギリシアから現代までの哲学を中心に、認知科学やAI、文学などさまざまな側面から、人類が生み出してきた「心」という存在を紐解く、『生成と消滅の精神史 終わらない心を生きる』を上梓した下西風澄氏を迎え、人類の心と表象について出展作家二人の作品を紐解きながらお話を伺います。

下西風澄 (しもにし・かぜと)

1986年生まれ。東京大学大学院博士課程単位取得退学。哲学に関する執筆活動を行っている。

著書に『生成と消滅の精神史 終わらない心を生きる』(文藝春秋)、絵本『10才のころ、ぼくは考えた。』(福音館書店)など。

執筆に「生まれ消える心一傷・データ・過去」(『新潮』2023.5)、「演技する精神へ一個・ネット・場」(『文學界』2023.6)、「ぼくは言語」(『群像』2023.8)、「詩篇 風さえ私をよけるのに」(『GATEWAY』)ほか。kazeto.jp

### ◆12月17日(日) 18:00-19:30 「シグナルと制作」

登壇者：榎本耕一、富田正宣、本山ゆかり、水上愛美、若林菜穂

絵画のなかで描かれる記号性や物語、絵画と世界との関係をそれぞれの領域で追求する作家3名を招いてクロストークをおこないます。

榎本耕一 (えのもと・こういち)

1977年大阪府生まれ。金沢市立美術工芸大学卒業後、同大学大学院博士前期課程中退。古今東西のモチーフをサンプリング、融合させながら、古代から現代までの物語を過密な情報と共に絵画へと昇華する。2020年以降の近作ではこれまでに習得してきた技法を操りながら、特に現代の都市と人々に焦点を当てた作品を制作している。

近年の主な個展に「Against the day」Nonaka-Hill (ロサンゼルス /2022)、「あいまいのしるし」金沢アートグミ (石川 /2021)、「NEW LIFE !!」TARO NASU (東京 /2020)、「わたくしは鳥に抱き締められて生きている」soda (東京 /2020)、「ストーン」TARO NASU (東京 /2017)、「超能力日本」HAPS (京都 /2015) など。

富田正宣 (とみた・まさのり)

1989年熊本県生まれ。2013年に東京藝術大学絵画科油画専攻卒業。身の回りの些細なモチーフや風景を収集し、その記録や感覚、物語を抽出するようにして、主に複雑な色彩と豊かなマチエールの絵画を制作する。具象にも抽象にも捉えうる油彩画は、作家が知覚する現象や世界の姿を包摂する。近年の主な展覧会に、個展「Iamella」HIGH ARTS PARIS (パリ /2023)、「LE BISCUIT À SOUPE」HIGH ART ARLES (アルル /2022)、個展「ユーセン」KAYOKOYUKI (東京 /2022)、「LA CONSTITUANTE」Parliament(パリ /2021)、「Emerging Japanese Painters」SHOP Taka Ishii Gallery(香港 /2021)、「Studio Exhibition」大野智史スタジオ (山梨 /2018) など。

本山ゆかり (もとやま・ゆかり)

1992年愛知県生まれ。2017年京都市立芸術大学大学院油画専攻修了。線や支持体、地と図など、絵画や鑑賞行為に関わる諸要素を分解・再構築する過程、あるいは記号とその受容との間に絵画表現を希求する。複数の異なる色の布を繋ぎ合わせ支持体とする「Ghost in the Cloth」、数字をモチーフとした「Plate」のシリーズ等で知られる。

近年の主な展覧会に、個展「この世、受け皿」Yutaka Kikutake Gallery (東京 /2022)、「VOCA展」上野の森美術館 (東京 /2022)、「現代美術のポジション 2021-2022」名古屋市美術館 (愛知 /2022)、個展「コインはふたつあるから鳴る」文化フォーラム春日井 (愛知 /2021) など。

## 【展覧会概要】

出展作家： 水上愛美、若林菜穂

展覧会名： 静かの海

会期： 2023年11月25日(土)～12月17日(日) 12:00-18:00 月火水休

会場： 駒込倉庫

住所： 東京都豊島区駒込2丁目14-2

企画： 若林菜穂、水上愛美、見目はる香 (oar press)

宣伝美術： 加瀬透

什器制作： 榎本留衣

協力： 駒込倉庫、4649

## 【問合せ先・トーク予約】

広報担当 oar press (オール・プレス) info@oarpress.com / www.oarpress.com